行為者への聞き取り調査に基づく個人的なブログでの日記行為に関する考察

A Study on the Blogging Behavior as Personal Diary through the Narrative Analysis of a Blogger

内　木　哲　也*　　崔　　初　瞳**

Tetsuya Uchiki　　Cui Chutong

１．はじめに

個人的なウェブサイトは、開設者自身がHTML[1]形式で作成する一般的なウェブページから、利用者が電子掲示版システムに逐次書き込むような感覚で独自のウェブページを作成できる、ブログ[2]を中心としたものへと変化してきた。特にブログには、ウェブページやページ内の特定の記事に対する読者のコメントや、閲覧状況などをそのページの作者に知らせる機能が用意されており、それが読者とのコミュニケーションを促すことから、その普及に拍車がかかっている。しかも、ブログでは、手軽に逐次追加的に書き込めることから、内容の更新も頻繁になされるようになり、「日記のように日々内容を追記更新する」こともできることから、ウェブ上での「日記」[3]が綴られた個人サイトが散見されるようにもなった。特に日本では、ブログ登場以前から、「日記」を綴るように日々ウェブページを更新する「ウェブ日記」が盛んであり、今日のブログ利用スタイルとしても、個人の「日記」を綴った「日記ブログ」がその上位に位置している[4]。

しかしながら、元来、個人の密やかな行為による日記を公開の場であるウェブ上に掲載する行為は、通常の日記行為としては十分な説明が困難である。そのため、日本を中心として、多くの先行研究がなされてきた[5]。中でも、ウェブ上での日記行動の継続性に関する一連の研究成果としては、ウェブ日記／日記ブログ[6]が持つ自己呈示機能による自己効用と、コミュニケーション機能による関係効用とが、利用者に満足感をもたらす主な促進要因として導き出されている。

ところが実際には、伝統的な日記と同様に、多くの「日記」が休止および閉鎖されており、継続的に更新されている「日記」の方がむしろ希な状況にあるといえる。しかも、同じ開設者によって継続されている「日記」でも、運用サイトの変更というだけでなく、種々の事由によって休止や再開、新規開始などの変遷を経ている実態があり、その内容やテーマ、書き方に変化が生じていることも観察されている。このような実態は、読者とのコミュニケーション機能によってもたらされた効用と考えることもできるが、むしろ日記行為者の意識や心的メカニズム自体が、種々の要因で変容することによって

*うちき・てつや
埼玉大学教養学部教授、情報システムの社会学的研究
**さい・しょとう
埼玉大学大学院文化科学研究科修士、（中国）松下電器有限公司上海分公司勤務

生じた現象として捉えるべきことと考えられる。

そもそも日記には自己との対話機能があり、日々追記される文章を通して、自分の考えや心情をまとめ、整理するだけでなく、執筆者は過去の自分と対話しているのである。日記は過去から蓄積された固有の状態を保持しているため、日記の状態変化と相互作用を繰り返すことで、執筆者の意識が形成され、変容してゆくものと考えられる。その意味から、日記は単なる一つの情報メディアとしてではなく、過去の経緯に基づいた固有の状態を保持しつつ、執筆者と相互作用を維持している情報システムと捉えるべきといえる。この観点に立てば、ウェブ日記／日記ブログの変遷の実態は、「日記」を巡る情報システムである、日記行為者とその読者とが形成する、コミュニティの変容として捉えることができる。しかし、このような日記行為者の意識やそれを形成する社会的な状況は、行為者個人に対する個別的な調査によらなければ導き出すことが難しいため、これまでほとんど為されてこなかった[7]。

以上のような背景から、本論文では、日記ブログの行為者への聞き取り調査から得た知見に基づき、日記ブログを巡る情報システムの全容と、そのメカニズムについて議論する。まず、実際に観察可能な日記行為の変遷を、その行為者への聞き取り調査によって、心理状態と意識変化に根ざした感受概念と関連付けて分析する。分析結果から、日記行為者は、ブログ制作画面での「日記」を記述する過程で、自己を物語ることで自己の確認と自己意識の形成が促進される「自己物語効果」と、物語の登場人物としての架空の自己を育みつつ、自ら演ずることで物語効果を拡大する「舞台効果」とを享受していることを明らかにする。そして、双方の効果の成果物として形成された「日記」を介して、日記行為者と読者とのコミュニティとしての情報システムが形成され、そのメカニズムが日記行為の継続性に強く関与していることを議論する。

２．ウェブ上での日記行為に関する先行研究

ウェブ上に個人が記載する「日記」は、その記載者の個人的な内容を日々追記更新するものであるが、非公開でプライベートな記述が前提である伝統的な日記とは異なり、書き終えた瞬間に広く公開される新たなコミュニケーション・ツールといえる。しかしながら、ウェブ上の「日記」も、伝統的な日記と同様に、個人の雑感や体験を個人の視点で記した内容であるため、記載者が日記行為を開始する動機や、継続する心的過程を探るべく、日本を中心に、社会心理学的観点から研究がなされてきた。

先駆的な研究は、川浦らによる、ウェブ上での日記行為者に対する、アンケートに基づいた調査研究[Kawaura, Kawakami, Yamashita 1998]があり、今日までの関連する多くの研究の基礎ともなっている。川浦らは、日記の内容が事実中心か心情中心かという観点と、日記行為者の指向性が自分自身に向けられているか、読者のような他者に向けられているかという観点から、日記を備忘録、日誌、（狭義の）日記、公開日記という４タイプに分類し、調査結果に基づいて、ウェブ上の「日記」にもこの４タイプが存在すると主張している。そして川浦らは、日記行為者が自分自身の内面に注意が向かう「私的自己意識」が強いか、または自分が他人からどのように見られているかに注意が向かう「公的自己意識」が強いか、という観点からこの４タイプを特徴付けている[8]。

さらに川浦らは、ウェブという公開の場における日記行為の継続を支えるメカニズムを解明すべく、V. J. Derlega が自己開示の機能的効用として示した[9]、(a)感情表出、(b)自己明確化、

(c)社会的妥当性、(d)対人関係の発展、(e)社会的統制の５つを援用して、日記行為の継続意向に関する心理モデルを構築し、この調査データに基づいて継続意向を支える要因を分析した。このモデルでは、自己開示に関するこれら５つの効用のうち、(a)と(b)の２つを開示の結果として自己の内面の明確化につながることから「自己効用」、残りの３つを他者との関係を発展させる方向に向かわせることから「関係効用」として統合し、双方を日記行為の主要な効用と位置付けている。そして日記行為の継続理由として、「関係効用」が強く作用していることを調査結果から示唆している [川浦, 山下, 川上 1999]。

この研究が示唆したいくつかの着眼点に対して、この知見を基礎とした研究が展開されてきた。第一は、ウェブ上の「日記」を、日記行為者と読者とをつなぐコミュニケーションの場として捉え、類型化しようとする研究が展開されている。村田は、この４タイプに基づいた調査を実施し、日記行為者の心理的効用が主観的なタイプにより深く関連し、読者との関係よりも自己に向けられるタイプの方が多いという結果に基づいて、日記行為者にとっての読者は、あくまで「観客」であることを主張している[村田 2003]。三浦らは、開設者がブログを「個人的事実を書く日誌として」、「心情を書く日記として」、「自分の意見を伝達するための場として」意識する一方、「社会的事実の記録として」、「ブックマーク代わりとして」、「議論を行うための場として」重視しない傾向にあることを、調査結果として導出している[三浦, 北山 2005]。

また、総務省で実施された、ブログの利用実態の調査研究においても、このタイプ分類軸を基に、指向性軸を「自己指向」、「特定関係指向」、「一般関係指向」、内容軸を「事実」、「知識・ノウハウ」、「心情」に発展させた９タイプ[10]を用い、ブログを分類し、分析している [情報通信政策研究所 2009]。この９タイプを用いたブログの利用動機の分析から、ブログ開設者を自己表現重視、コミュニティ形成重視、社会貢献重視、収益目的重視、アーカイブ型重視の５種類のグループに分類し、利用動機としては自己表現重視群が最も割合が高く、開設者の心的な効用に強く関連していることが示されている。

第二は、日記行為者の性格や心理特徴に関する研究の展開である。菅原らは、ウェブ上の「日記」の４タイプを用いて、「賞賛獲得欲求」の強さと「拒否回避欲求」の強さという観点から、その性格特性との関係性を検討している[11][菅原, 鳴神2004]。同様の枠組みで、日記行為と行為者の孤独感との関係性を解明することを目指した調査研究もなされており、志村の調査では、新たな対人ネットワークが創出される効用を意識する日記行為者の割合は、他の効用より若干低いことから、日記行為による新たなネットワーク創出の意味はさほど大きくないと結論づけられている[志村 2005]。また、吉田の調査では、女性利用者に限り、孤独感とブログ利用との有意な相関が見られたと報告されている[12] [吉田 2006]。

第三は、日記行為の継続性に関する研究の展開であり、ウェブ上で「日記」を綴る行為を継続する心理的メカニズムの解明を通して[13]、行為そのものの本質的な意味を探ろうとする研究といえる。この研究は、川浦らが中心となって精力的に進められており、行為者へのさらなる調査に基づいて、「自己効用」と「関係効用」を中心とした心理的メカニズムを、「データベース型」や「日記型」などの利用スタイルに応じた形として示している[山下, 川浦, 川上, 三浦 2005]。さらに、三浦らは「情報ハンドリングを高める効用」を加え、近年顕著になってきた「知識共有型」ブログに対応したメカニズムを提示している[Miura, Yamashita 2007]。

以上のように、日本を中心になされてきた一連の研究は、川浦らの先駆的研究を基礎として、その枠組みを活かす形で進展してきた。それらの研究のほとんどは、ウェブ上での「日記」が、自己表現の手段であると同時にコミュニケーション手段である、というメディアが内包する機能面から出発し、日記行為者が「日記」というメディアと対峙する心理を解き明かそうとするアプローチが採られている。そのため、日記行為の目的や効用も、メディアが内包する機能面を中心に捉えられ、「行為の内容」ではなく、「行為すること」を効用の主軸に据えた、ある種の技術決定論[14]に立脚した形で、モデルが構築されてきたと捉えることができる。しかも、これらの研究で提示されている日記行為の継続メカニズムは、開設時や調査時での心情や欲求といった、ある一時点における心的状況とウェブ上の「日記」がもたらす効用に基づいてモデル化されている。

しかしながら、日記ブログの「継続性」は、本来ある期間における一連の行為として、時間経過による変化をも含めて捉えるべきことである。また、これらの研究で示されている「自己効用」と「関係効用」も、ブログ自体が継続されていく過程で、常に一定の効用を持つのではなく、書き手の心理的プロセスを含めた、ブログを介在して形成される情報メディア環境全体の変化と深く関わっている。つまり、日記ブログの継続メカニズムは、日記行為と読者の反応、そしてそれらによって形成されるコミュニティとの相互作用などのダイナミズムを包含する、社会的な情報システム[15]として捉えるべきことなのである。実際、インターネット上には、日記活動が中断されたままで放置されている「日記」が、多数散見される。さらに、既に削除されてしまったブログを考慮すれば、図１に示したように、現在活動が継続されているブログの方が、むしろ少数で希なケースとさえいえるのである。しかも、ブログでの個人的な日記行為者へのヒアリングから、日記行為を継続中の行為者でも、ブログサイトの変更や、日記行為の中断、日記ブログの閉鎖などの変遷を経ていることが、明らかになってきた[16]。このような状況からも、日記ブログの継続性に対する根源的な考察には、「継続」だけでなく「継続不能」の要因についても探り出し、これら全体の利用者行動として解明すべきことが示唆されている[17]。

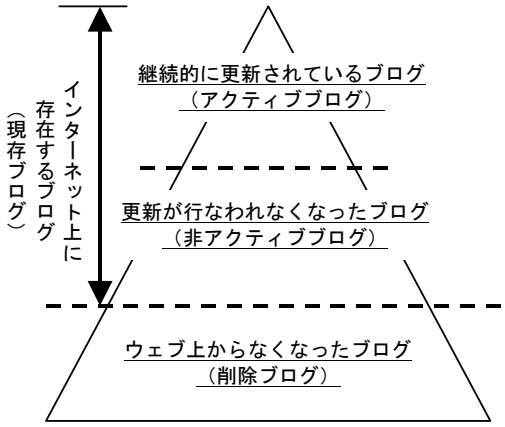

図１　現存するブログの位置付け
［情報通信政策研究所 2009］

以上の観点から、日記行為の具体的な実態と、その継続性とを解明する手掛かりを得るために、日記行為がもたらす効用と、その時系列的な変化とに焦点をあてて、ブログでの個人的な日記行為者への聞き取り調査を実施する[18]。

３．日記ブログの行為者への聞き取り調査

日記ブログの開設者が日記行為を開始した動機や、行為を続けようとする意識および心理状態を具体的に明らかにするため、長年継続的に日記ブログに書き込みを続けている行為者への聞き取り調査を実施した。

３．１　調査対象者のプロファイルと日記行為の概況

調査対象者は、20 代後半の社会人女性[19]で、2005 年 2 月から調査時点の 2010 年 10 月まで５年半の間に、自身のブログサイトで継続的に「日記」を書くと同時に、他者の日記ブログに対しても積極的にコメントしている。しかし、対象者は単に継続的に一つのブログサイトで日記活動を続けていたわけではなく、表１に示すように、ブログサイトの変更やオフラインパソコン上での日記活動などの変遷を経ている。また、２つの日記ブログを同時に運用している期間や、日記活動自体を休止している期間もあり、ブログの開示設定の変更や、字数制限の厳しいミニブログへの乗り換えなどの行為もなされている。

表１に示されているブログ専用サイトとは、ブログサイトの運営を専業とし、関連システムやサービスを提供するブログ専業系サービスを指している。専用サイトでは、利用者それぞれが好みに応じて独立のアドレスを設定できるため、各利用者が独自のブログサイトを運営している形態となる。また、他者のブログへの書き込みの際には、自分のブログへの投稿用とは別のユーザ ID を設定でき、ブログ間相互および自分のブログとの関連性を隠蔽できることから、発言者の匿名性が高いことが特徴である。これに対して、付加的サービスとしてのブログは、ブログサービスが主体ではなく、電子掲示板サイト(BBS[20])や SNS[21] などのコミュニケーションサイトで、付加的に提供されているサービスを指している。付加的サービスのブログでは独自のアドレスが提供されず、その基本サービスサイトにアクセスして特定のブログ名を指定することでアクセスする。そのため、読者には直接アクセスできる独立したサイトのように見えないだけでなく、他者のブログへも自分のブログへも同じユーザ ID での書き込みとなるため、発言者同士の関係性が掴み易くなっている。

表１に挙げられた「歪酷(Ycool) Blog」は、調査対象者の居住地域を中心として活発に利用されていたブログ専用サイトであるが、当時はマスメディアやポータルサイトとの連携もなされておらず、普及範囲が全国規模ではない地域限定性が高いサイトであった。「歪酷 Blog」が備える主な機能は、基本テンプレートの選択と、記事カテゴリーの設定、閲覧制限、コメント機能、トラックバック機能などであり、RSS[22] によりスタートページには最新更新状態が表示されるようになっていた。また、2006 年には、音声・動画ファイルと特定利用者に対するコメントを拒否する機能が追加されている。

一方、付加的サービスとして挙げられている「百度(Baidu)」BBS は、全国規模での普及している、検索サイト「百度」が提供する電子掲示板サービスであり、掲示板への個々人の書き込み記事やそれに対する来訪者のコメントを、個人のブログのように表示できる機能を持っている。そのため、ブログへの書き込みは、自分のブログの更新でも他者のブログへのコメントでも、必ず BBS のユーザ ID で為されることとなる。また、特定のブログに直接アクセスすることはできず、BBS サイトのトップページを経由する必要がある。

「開心(Kauxin)」SNS は、全国規模で普及しているコミュニティ型の会員制のサービスであり、趣味や嗜好、居住地域、出身校などによるソーシャルネットワークとしてのコミュニティが構築できる。「開心」SNS には、個々人の書き込み記事やそれに対する来訪者のコメントを、個人のブログとして取り扱える機能があり、さらには投稿記事とコメントとに字数制限があるミニブログ[23] の機能もある。ブログ機能はブログ専用サイトのサービス機能とほぼ同様である

表１　調査対象者の日記活動の推移（2005年2月～2010年10月）

区分	開始・終了	期間	ブログサイト		プライベートな日記
			ブログ専用サイト	付加的サービス	
Ⅰ	2005.2－7	6ヶ月	「歪酷Blog」		
Ⅱ	2005.8	半月			ワードパット
Ⅲ	2005.9－12	4ヶ月		「百度」BBS	
Ⅳ	2006.6－7	1ヶ月	「歪酷Blog」*1		
Ⅴ	2006.6－11	6ヶ月	「歪酷Blog」*2		
Ⅵ	2006.12－2007.2	3ヶ月			日記帳
Ⅶ	2009.3－7	5ヶ月			日記帳
Ⅷ	2009.9	4日		「開心」SNS	
Ⅸ	2009.9－ 現在(2010.10)	継続中 1年以上		「開心」SNS*3	

*1 同一のユーザ管理下で見かけ上は異なる２つのサイトのように設定。こちらは公開
*2 同一のユーザ管理下で見かけ上は異なる２つのサイトのように設定。こちらは非公開
*3 字数制限のある通称ミニブログと呼ばれているサービス

が、独立したアドレスを持たないため、ブログ間の相互リンクを張ることができない。また、ミニブログの方は、記事の投稿とそれに対するコメントの書き込み以外の機能は提供されていない。

調査対象者は、2005 年 2 月に専業ブログサイトである「歪酷 Blog」にて、初めて日記ブログを開始したが（区分Ⅰ）、6 ヶ月後の 7 月に活動を中止し、8 月からはパソコンのワープロソフトを用いて、通常の日記と同様に、プライベートに日記をつけていた（区分Ⅱ）。しかし、それも半月程で中止し、9 月から 12 月までの 4 ヶ月間、「百度」という電子掲示板(BBS)が備えるブログ機能を利用して、日記ブログを記している（区分Ⅲ）。そして約半年間の活動休止期間の後、2006 年 6 月から「歪酷 Blog」ブログでの日記ブログを再開した（区分Ⅳ・Ⅴ）。再開に際して、一方を公開、他方を非公開とした２つの独立したブログサイトアドレスを設定し、同時に２種類の日記活動を行っていた。しかし、公開された日記ブログでの活動は、１ヶ月という短期間で休止し、非公開の日記ブログも半年間で休止した。そして、後者を引き継ぐ形で、日記帳へと活動の場を移して、2007 年 2 月までプライベートに日記を綴っていた（区分Ⅵ）。その後、約２年間の休止期間を経て、2009 年 3 月から日記帳でのプライベートな日記を再開し（区分Ⅶ）、7 月まで 5 ヶ月間継続した後、9 月からは「開心」という SNS が備えるブログ機能を利用し、日記ブログを書き始めた（区分Ⅷ・Ⅸ）。しかしながら、この日記ブログはわずか 4 日で休止し、同じく「開心」SNS が提供する、書き込み字数に制限がある、ミニブログ上に日記ブログの場を移して、現在[24] まで「日記」を継続している。

３．２　日記行為の具体的状況

調査対象者の日記活動の特徴は、その推移か

らも窺い知ることができるように、最初のブログ専用サイトの開設から閉鎖に至る間の体験が、その後の日記行為に対して大きく影響している。対象者は、区分Ⅰでの体験から、日記ブログの開設に強く惹かれながらも、日記ブログを継続することにある種の恐れを感じていたように見受けられ、それ故に、日記ブログの再開および新規に開設しては中止するという行為を繰り返していたのである。そして、最初の日記ブログの閉鎖から４年が経過した区分Ⅸの状況において、ようやく自分にとってバランスのとれた日記活動のあり方を見出すことができ、安定的に日記活動を継続してきたわけである。

そこで、一連の行為の原体験となった区分Ⅰでの出来事について、対象者へのヒアリング調査を行い、対象者が保持していた「日記」データと付け合わせながら、問題の経緯を明らかにすることを試みる。なお、以下の記述における「投稿者」は、本研究の調査対象者を指し示している。

Ⅰ－１　日記ブログの開設

投稿者の生活状況：　投稿者は大学を卒業して就職し、故郷から離れて、慣れない都市に一人で住むことになった。会うことができる友達が少なくなったため、多くの時間を電話やネット上のチャットツールやメールによる親友とのコミュニケーションと、RPG[25]のオンラインゲームとに費やしていた。

日記ブログ開設の動機：　投稿者はこれまでのネット空間上での活動を通して、自らが作り出した空間を保持したい、そしてその空間上に自分自身の足跡を記録したいと願望するようになったが、技能的未熟さからウェブページも開設できずにいた。ちょうどその頃、ブログ専用サイトが普及し始めたため、その多様な表現方式と日付順での配列方法に直ぐに惹きつけられ、ブログ専用サイトである「歪酷 Blog」に自分の日記ブログを開設した。

開設にあたってのこだわり：　投稿者はブログの名称にかなりこだわった。ブログ名はそのブログのトップページに表示されるのみならず、ブログ自体のアドレスともなったからである。記事のカテゴリーの設定は、日常生活の各方面に対応してシンプルに設置する一方で、自分らしい雰囲気を醸し出すために、テンプレートに独自の加工も施した。ブログの内容は公開に設定し、読者とのコミュニケーションのための、コメント機能とトラックバック機能も動作可能に設定した。なお、ブログ開設者のユーザ ID は、実名を連想し難い ID およびメールアドレスを用いて匿名でなされていた。

日記ブログの状況：　「日記」の更新率は 1～3 日毎に一回程度であり、投稿者自身の貴重な思い出の再現と、新しい生活での新鮮な感覚や、その不安と期待に関することが中心に記されている。普段吐露できない気持ちや、投稿者の特殊な嗜好、秘密の感情なども一部に見受けられるが、ほとんどが自分の見解と考えに基づいた比較的長い文章が記されている。「日記」は、投稿者の生活体験に基づいて綴られているものの、情報を取捨選択し、特徴的な画像を添え、ある意味で理想化され美化された表現となっている。

読者の状況と投稿者の意識：　基本的には投稿者自身が固定的な読者となり、記述後に繰り返し読むことを楽しんでいた。特に日付順で配列されたテーマを見ることによって、過去の生活を確認することが、当時の投稿者の習慣となっていた。気になった箇

所は何度も繰り返し見ることさえあった。同じブログサービスの利用者が、時折来訪し、コメントの書き込みもなされたが、その回数は多くはなかった。

当時の心境：　投稿者は書き込んだブログを読み返すことで、強い安心感を覚えていた。ブログを続けることで、愉快な、そして充実した気分がもたらされたと感じ、ブログ開設以前の生活と比べて、投稿者自身がより生き生きしていると実感していた。さらに、ブログへの来訪者から同意のコメントが得られると、投稿者自身の心が舞い上がると同時に、自分が理解されている満足感で満たされもした。現実の自分を隠蔽した安全なブログ空間が実現できたことと共に、他の人々とのつながりも実感していた。

Ｉ－２　対読者意識の強化

状況変化の要因：　「歪酷 Blog」で「キーワード連携」という機能が提供され、ブログの内容に、利用者がよく用いるキーワードを設定することにより、「歪酷 Blog」のホームページに示されたキーワード群から、直接関連するブログが選択できるようになった。投稿者もこの機能を活用してブログにキーワードを付与したところ、投稿者と同じ趣味を持つ多数の読者が、投稿者のブログを訪れるようになった。

日記ブログの状況：　投稿者は毎日必ず自身のブログへ投稿するようになっており、読者の存在を意識してか、ブログ上での登場人物名は、それ以前より抽象度の高いニックネームを使用し、場所や日時などの具体的な情報も略称されている。またこの頃から、ブログに書き込まれた具体的な日時は、現実の発生日時と必ずしも一致しなくなっている。内容についても、投稿者は情報の取捨選択や単なる修辞的な技巧だけに満足できなくなり、読者の興味を引くための工夫を施した文章スタイルで、内容そのものにも多少手を加えた記述をし始めている。そのため、「日記」は投稿者の体験や事実に基づいてはいるものの、読者を意識した創作を織り交ぜた内容へと変貌しつつある。

読者の状況と投稿者の意識：　投稿者自身は、これまで通りに読者として、よく日記を振り返って読んでいたが、来訪者数の増加に従い、コメントも増え始めている。また、コメントのあった読者のブログを投稿者自身が訪ねるようにもなり、逆方向の交流も活発化している。固定的な読者グループも出現し始め、彼らと相互にリンクを張るようにもなっている。しかし、投稿者が自分の日記を読む気分は、以前のゆったりとした気分とは異なり、読者の感想を想像しながら厳しい検閲の目で読むようになっていた。実際、気になる部分に対して、幾度も内容を書き直すことや、加工し直すことさえもしばしばあった。

当時の心境：　肯定的なコメントを受けたときの満足感に酔いしれ、肯定的なコメントが受けられるよう、読者の反応を強く気にするようになっていった。その一方で、日記ブログを続けることへの周囲からの圧力感と責任感とから、以前程には自由に日記行為をできないと感じ始めてもいた。投稿者の関心も、日記ブログそのものから、読者の心理を推測し、その読者像が求める内容を提供することに移り始めていた。

Ｉ－３　コミュニティとしての様相

状況変化の要因：　投稿者を含めて、互いの日記ブログを頻繁に行き来する、固定的な投稿者仲間が形成されてきた。相互のコミ

ュニケーションの深化に伴い、ある種コミュニティのような関係にまで発展し、その仲間によるコメントや各自の日記ブログの中で、互いに内容に言及する記述が出現するようになった。特に、その仲間の一人による日記ブログは、多彩な趣のある暮らしぶりを見せていたため､好評を博していた。

日記ブログの状況：　投稿者が毎日日記ブログを書くことは、この時期既に習慣化しており、日に２、３回ブログを更新することさえあった。更新記録を見ると、特に記録すべきことがなくても、生活上の瑣末な出来事を拡張したり、加筆したりして、ブログに書き込んでいる。また、ネット上の読者の注目を集めるために、日記のテーマを巧みに工夫した跡も窺える。投稿者に関する情報の抽象度が、それ以前より高くなっていることに加え、ブログに掲載する全ての画像と写真とはソフトウェアで事前に加工処理している。ブログの内容も、現実的内容よりも誇張部分が多く見られるようになり、完全に創作された内容さえ散見されている。

読者の状況と投稿者の意識：　投稿者自身が読者としてブログを読み返すことは続けられていたが、もはや関心の的は「日記」本体からブログ読者とのコミュニケーションへと移っていた。日記ブログへの来訪者もさらに増え続けており、投稿者は来訪者の数を非常に気にするようになっていたばかりか、来訪者数を増加させるために、同じ日記内容を何度も更新する行為さえ行っていた。ブログが更新されるたびに、システムの RSS 機能によって､ブログの要約がブログサービスのホームページに出現するからである。その上、他者のブログにコメントをする際にも、自分のブログのアドレスを残し、ブログの宣伝行為に精を出していたのである。

当時の心境：　日記ブログの内容をコントロールすることを通じて、投稿者は、ブログに書き込まれた日記の中に存在する自分こそ自分である、という心理が芽生え始め、その心理から、日記の改編によって現実の自分も変われるような錯覚に陥っていた。投稿者は、よく自分のブログに訪ねてくれる読者に好感を抱く一方で、彼らが失意を抱くことへの不安感にも襲われていた。そのため、日記ブログ上に形成された自己イメージがもたらした、称賛と評価による満足感の高揚とは裏腹に、ブログを続けることに心労を感じ､ストレスともなっていた。投稿者は、自己の分裂感を意識し始め、現実の生活にも精神的な影響が現れ出したため、次第に「日記」を止めることを考えるようにもなった。

Ｉ－４　日記ブログの閉鎖

要因となった事件：　ある日、投稿者が家に同僚を招待して料理を振る舞ったことについて、ブログに投稿した。しかし、投稿者は「日記」で現実の詳しい事情を全て書き替えて創作していただけでなく、実際にはなかった「料理が美味しくて、皆楽しそうに帰った」という投稿者の理想的状況を付け加えた投稿内容であった。この記事に対して、投稿者仲間の一人から「わざとらしい」というコメントをこの記事の直下に書き込まれた。

投稿者の心境と行動：　投稿者は、それまで秘匿されていたことが全て暴かれてしまったように感じ、ショックを受けて意気消沈した。このコメントは、投稿者自身が以前からわかっていた事実に向き合うきっかけ

となり、自分自身を欺く行為を中止する切っ掛けとなった。しかしその一方で、ブログ上に形成された自己のイメージと現実の自分との双方を嫌悪するようになった。

事の顛末：　投稿者は、ブログを継続する意思を完全に喪失したが、「わざとらしい」というコメントが要因であることを投稿者仲間に悟られないように、苦しい気持ちの中で数日間ブログを継続し、最終的に全く別の口実を設けてブログを閉鎖した。投稿者はブログ上の内容を自分のパソコンにダウンロードした後[26]、ブログサイトを丸ごと全て削除してしまった。

３．３　各状況における行為者の意識と心理の様相

調査対象者は、以上のような日記ブログにおける事態の理解と自己の心的整理とのために、これ以降の日記行為を営んできたといえる。事件直後になされた区分Ⅱでのプライベートな日記は、誇張や虚飾の無い自由な表現で自己の心情が記述されているが、読者不在の状況ではもはや満足感が得られないことを再確認することとなり、半月たらずで中断されている[27]。そこで、再び日記ブログを希求するようになり、区分Ⅲのような、投稿者自身も含めた参加メンバーの指向や趣味がある程度明らかな、あるイベント向けの BBS コミュニティで、日記ブログを開始している[28]。このブログはイベントの終了と共に閉鎖されることとなるが、対象者はこの経験である程度自信を取り戻し、再びブログ専用サイトでの日記ブログを開設したのである。

日記ブログの再設置において、対象者は、心理的な安全対策として、公開と非公開との２つのブログを同時に開設している（区分Ⅳ、Ⅴ）。公開された日記ブログは、最初のブログ同様のこだわりで設定しているが、先の経験を踏まえて、来訪者数カウントやリンク設定などの機能は設定していなかった[29]。文章も以前とは大きく異なり、エッセーと短文、そして詩のような形で表現されており、更新頻度も週３～４回程度のマイペースで行われている。このようにして、読者のコメントや来訪数に踊らされ、読者に迎合することで自分自身を見失うことが無いよう、慎重に再設置していたことが窺える。対象者は、次第に不安が解消され、日記ブログを綴ることから満足感と充実感、そしてそれを続けることへの自信を深めていくのである。しかしそれは、匿名利用が前提の個人の日記ブログと相容れない、実名表示の強要という「歪酷 Blog」自体のシステムサービスの方針転換[30]により、あえなく終焉を迎えてしまう。その後、対象者は非公開ブログを暫く継続するものの、読者がいない環境では、プライベートな日記と同様に、張り合いを得ることができなかった様子で、約半年後に日記帳へと日記行為の場を移した後、そちらも数ヶ月で中断している（区分Ⅵ）。

退職、留学などで生活環境が大きく変化した時期を経過し、ようやく日常感覚を取り戻しつつあった頃、恋愛感情による幸福感の高揚から、日記帳に日記を綴るようになる（区分Ⅶ）。書き綴られていることは、恋愛にまつわる日々の幸福感が中心であるが、対象者の充足感と共に次第に心の平安を取り戻していく様が見て取れ、気持ちが落ち着いた辺りで中断されている。そして、落ち着いた心持ちで、友人や家族のような実世界で顔見知りの人々に向けて、異国で暮らす自分の安否を日常経験や心の機微を報告するために、実名が条件となっている SNS サイトの付加サービス機能を用いた日記ブログを開設するのである（区分Ⅷ、Ⅸ）。対象者のこの行為は、自由なユーザ ID による匿名でのブログサービスが提供されなくなって以降、完全にあ

きらめていた日記ブログを希求する心情を顕著に表している[31]。それが区分Ⅷ、Ⅸという２つの実験的要素を含んだブログ開設となったのである。対象者は、以前と同様の日記ブログとミニブログと呼ばれる短文によるブログとの双方を開設するのであるが、当初から予測していた通りに、実名によるネット空間では、ネット上の見ず知らずの他者に対して自己呈示し、自己の存在を主張する表現が自由にはできないことを改めて悟り、早々に閉鎖してしまったのである。このときから現在まで継続されているミニブログでは、対象者は実際の生活上の体験や心象を短文や詩で表現することに愉悦感を見出そうとし、内容から満足感を得ているように見える。しかし、聞き取り調査からは、対象者は今でも以前のような匿名で自由に表現できる日記ブログを切望しており[32]、そのようなメディアを探し求めているという心情が強く感じられたことも事実である。

４．聞き取り調査結果の分析と考察

聞き取り調査内容からわかるように、本調査の対象者は至極一般的な社会人女性であり、専門的な知識を提供するのでも、特殊な技能や社会的地位による特別な経験を披露するのでも、ましてや営利その他の目的での広報活動としてでもなく、個人的な欲求から日記行為を営んでいる。その上、調査対象者からは、純粋にウェブ上での日記行為を希求し、ブログというメディア環境における日記行為のあり方を追い求めている姿さえ窺える。実際、日記行為の中断も、コミュニティからの排斥や誹謗中傷といった、外的な要因によるものではなく、むしろ行為者自身の自己認識による居た堪れなさや心境の変化によるものであった。

調査対象者がブログを開始したそもそもの動機は、故郷を離れ社会的立場も変化した人生の転換期において、自分自身のアイデンティティを確立しようとした行為と捉えることができる。当時、対象者はネット上の RPG ゲームに熱中していたが、それも現実生活の自己像を強化するためであったと回想している。対象者は、ゲーム空間で創造されたアイデンティティが現実から独立した別の存在であり、この行為によっては自己のアイデンティティが確立できないであろうことを、当時既に気づいていたようでもある。このような状況下におけるブログとの出会いは、自己を物語り、読者として語られた自己を再認識できるメディアとしてのブログをより魅力的に感じさせ、対象者を強く引きつけたであろうことが想像に難くないからである。

４．１　情報メディアとしての日記ブログの効用

ブログが持つ情報メディアとしての特性は、追記される投稿記事の時間順序が明瞭なことである。ブログは、特定のテーマ毎に記事が配列される電子掲示板とは異なり、通常日付降順ではあるものの、逐次追記された投稿記事が時間配列で表示される点で、日記と同様である。そのため、ブログは、日記のように自己という存在を時間軸に沿って概観し、一貫性を持った自我像として再認識することを可能としている。しかも、浅野が指摘するように、自己を物語るために不可欠な物語の受け手が想定され、自己は必ず結末から逆算された形で選択、配列される形で物語られる[33]、という点からすれば、日記ブログは通常の日記以上に、自己を物語るのに適した情報メディアといえるのである[34]。

日記ブログはウェブ上で公開されるメディアとしての特性から、その内容にはそもそも２つの側面がある。一方は、ネット上で読者が受け取ることができる、一般的にブログとして認識

されている内容である。他方は、投稿者の現実生活の一部として、ブログの管理ページ上に映し出される行為状況としてのブログ内容である。ここで注目すべき点は、追記され公開された日記ブログの内容そのものよりは、追記する日記ブログの内容を確定するまでの執筆過程にこそあるといえる。ブログの投稿者である日記行為者は、意識に上るか否かは別として、受け手の存在を承知しつつ、自己のアイデンティティを確立すべく自己を物語る日記を綴っているからである。

調査対象者が述べている「投稿内容の見直し」は、投稿が完了して公開された「日記」も含まれるが、主として公開以前に管理ページ上に表示される執筆作業中の内容が対象である。対象者は、ブログが備える多彩な制作および編集機能を用いて、アドレス名やテーマ設定、テンプレートの選択と加工、記事カテゴリーの設定、画像・音声・動画の貼り付けなど、豊かな自己像を形成するための演出努力を行っている。これらは、ブログに表出される自己像の形成過程において自分らしさを認識する行為、と捉えることができる。そしてこの過程は、身の回りの出来事をブログの枠組みの中で分節し、接合し、位置付け、意味を与えると同時に、自己の行為を方向付け、自己の認識へと導く、日記行為者に対する自己物語効果としても作用するのである[35]。このようにして、日記ブログの行為者は、投稿過程においてブログという情報メディアから自己物語の効果を受け、自己認識による充足感や安定感、実体感などの地に足を着けるような心的効用を享受していると考えられるのである。

また、E. Goffman が示した自己呈示の知覚域という概念を援用すれば[36]、日記行為者は、舞台演出された事実が現われる「表局域」としての投稿記事を作成するために、「裏局域」で演出すべき素材を取捨選択し、潤色し、さらには虚飾し、修正さえも行っていると、捉えることができる[37]。この観点に従えば、日記ブログの管理画面という裏舞台は、この「裏局域[38]」に位置付けられる。ブログにおいて「表局域」と「裏局域」という自己呈示の環境ははっきりと区分されているため、投稿者は地位、服装、性、年齢、人種的特徴、身体の大きさ、容貌、姿態、言葉づかい、表情、身振りなどを自由にコントロールでき、適宜隠蔽することさえできる。しかも、実際に出来事が生起した時点と、執筆する時点の間に差があるため、投稿者がじっくりと自分の態度や心情を整理し、調整することも可能である[39]。さらに、作者について読者にある程度神秘性を抱かせることや理想像を作り上げるための努力は、高揚感や愉悦感も得ることができる刺激的な行為である。それは、行為者に一種の陶酔感をもたらすだけでなく、昂ずれば、対象者が経験したように、演じることにのめり込ませてしまう危険性さえもある。

このように、日記行為者は、日記ブログの舞台裏での投稿内容の見直し作業を通して、「自己物語効果」によって自己と向き合うと同時に、この効果を高めるために呈示される自己を演出することで「舞台効果」を得ていると捉えることができ、これらは図２のように模式的に示すことができる。

４．２　日記ブログを巡る情報システム

ブログが内包する自己物語効果と舞台効果は、それぞれが日記行為者に異なる効用をもたらすだけでなく、その心理的な作用も大きく異なる。自己物語効果は、自己の再認識による充足感や安定感、実体感などのような直接的な自己効用として日記行為者に認識される。これに対して、演者としての自己がもたらす舞台効果は、演ずることによって得られるであろう自己物語効果

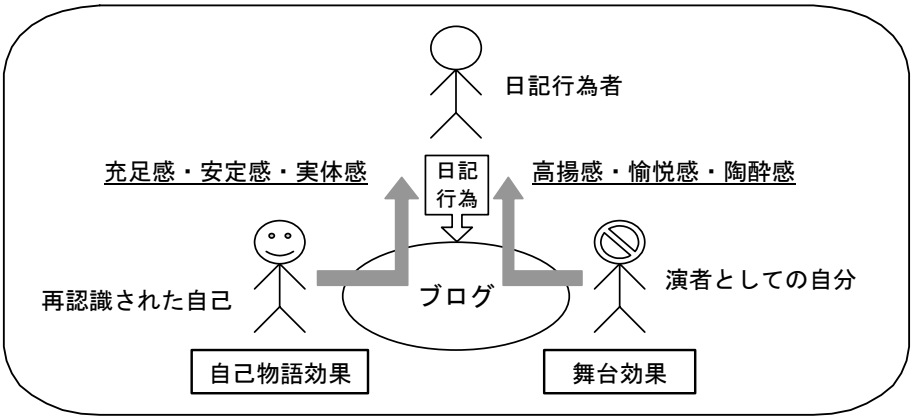

図２　日記行為者へのブログの効用

への間接的な期待として意識されることである。このような間接的な期待が日記行為者の高揚感や愉悦感を誘い、ブログがもたらす直接的な自己効用をより強く感ずるように日記行為者に作用すると考えられる。

この両者の効果とそれらがもたらす心的な効用の関係性こそが、日記ブログの継続的維持および継続不能な状況をもたらす重要な鍵といえる。そもそも、自己への物語を形成するためには、読者という相手の存在感がある程度必要なため、日記ブログの「表局域」には読者を引きつけるような演出が不可欠である。そして、来訪者や読者の共感する声のような情報は、物語る相手を具体的に認識することによる舞台効果の強化へと作用し、間接的に自己物語効果を強化する。このようなメカニズムによって、日記行為の継続が促される一方で、舞台効果がもたらす陶酔感によって演じることへの傾注が促されると、自己と物語の登場人物との乖離が著しくなり、分裂感が意識されるようになる[40] だけでなく、行為自体が継続不能な状況とさえなるものと考えられる。

調査事例に示された区分Ｉの具体的状況がこの経緯をよく示しており、日記ブログが内包する２つの効果がもたらす心的な効用関係に基づいて、日記行為が継承不能となった一連の因果関係を図３のように表すことができる。この状況では、ブログシステムのサービス変更によって強化されたキーワード連係機能が、調査対象者の日記ブログへの来訪者を爆発的に増加させ、リンクの設定機能が、頻繁にコメントを交わす固定的な読者グループを形成させる。読者数とコミュニケーション量の拡大に伴う、舞台効果の極端な高まりがもたらす間接的な効用が、対象者の意識対象を日記本体から、読者とのコミュニケーションへと移行させることとなる。「公開的な隠蔽場所」が「隠蔽的な公開場所」に変貌した、と調査対象者が回想するように、その読者グループを中心とした強力な舞台のオーディエンスたちの関心を引くために、「表局域」を飾る演技性が高まっていったのである。但し、この頃の調査対象者は、ブログという場が容認する社会的な虚栄の枠組みの中で、ブログでの創られた自己からある程度の満足感を得ていたとも語っており、記録されているブログからも、自己物語効果と舞台効果とのバランスが、未だ意識的には保たれていた様子も窺える。

しかし、仲間から脚光を浴びるブログ投稿者の登場は、そのブログの「表局域」の魅力と共に来訪者数やコメント数などの点からも対象者

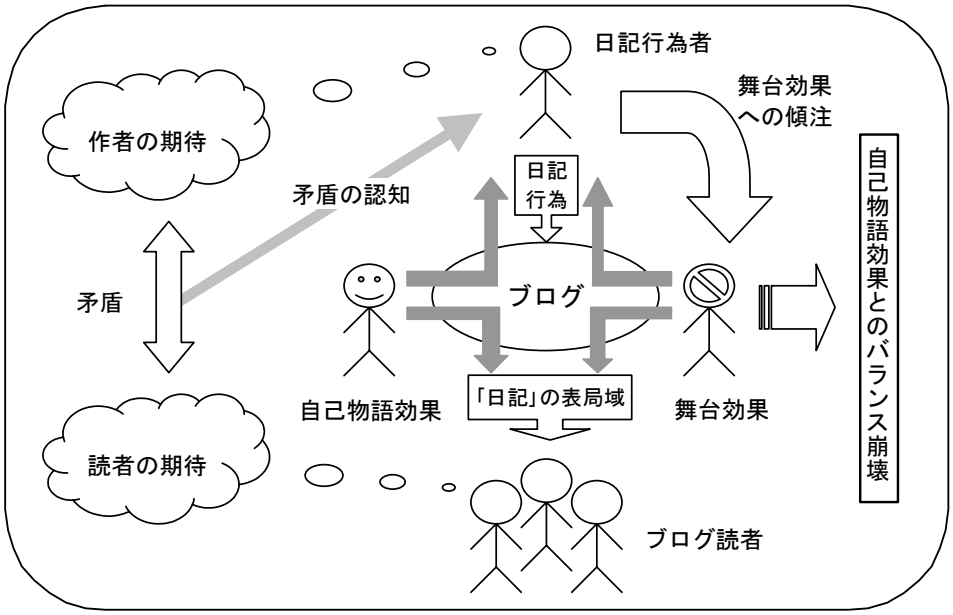

図３　継続不能な日記ブログの因果関係

の舞台効果を相対的に低下させることとなったため、その効果の回復を目指して益々舞台効果へと傾注することになるのである。それは、作者が期待する効用をもたらす自己物語効果を減少させるだけでなく、却って読者が「表局域」に求める期待との矛盾を意識させることともなる。調査対象者は、自己を認識するための日記行為が自分自身を欺く不誠実な態度でなされていること、に気づくこととなる。しかも、好意を抱いている読者への期待に応えるべく、矛盾を感じながら演技を続けることは、ブログを通じた自己確認もできないことから更なる空虚感へと繋がり、自己とブログの登場人物との乖離から分裂感に苛まれることになるのである。このようにして､心的に疲れ果てていたところで、読者から演技の稚拙さを指摘されたことが[41]、ブログを中止する気持ちの背中を押す形となり、ブログが閉鎖されたと捉えることができる[42]。先に示したブログの効用関係を用いることで、以上のようにブログが継続不能な状況へと至る経緯を説明できるのである。

５．情報システムとしての日記ブログの継続性に関する考察

図３に示したように、ブログを自己物語効果と舞台効果とを中心に形成される情報システムと捉えることにより、本調査事例の分析のみならず、ブログの現状を理解する手掛かりをも得ることができる。まず、１～２回記されただけで休止されているブログや、現存しないブログの開設を試みた利用者が多く存在するという状況は、これまで興味本位で試みとして開設したことが要因と考えられてきた[43]。実際、個人の記録を公開の場に残すという、ブログメディアの趣旨にそぐわない使用によるものが多数あることは想像に難く無い。調査対象者がわずか４日で閉鎖した例も、開設目的と機能状況の不一致ということで意を異にするものの、基本的には開設者の趣旨に沿わなかったことが理由であ

った。しかしながら、現在継続されている個人ブログも興味本位や試みで始められたであろうことから、それ以外の要因についても検討する必要があると考えられる。

個人ブログがメディア特性として適合する日記ブログとして開設されながら、情報システムとして機能できずに、わずか数回の投稿で休止状態に至ったとするならば、その行為者が自己物語効果を十分に得られなかったことが原因として示唆される。要因のひとつとしては、「日記」の表局域が、行為者に効用をもたらす程に、読者を引きつけられなかったことであり、文章やキーワード、画面デザインなどの機能的な表現方法と共に、自己呈示と演出とによるブログの内容が、読者の関心を引きつけることができなかったことが考えられる。しかしそれ以上に重要なことは、本調査の分析結果でも示されているように、「日記」の裏局域、つまり日記ブログ制作過程で行為者が効用を感じ得たか否かにあるといえる。この過程での効用が得られなければ、ブログという情報システムにおける、主要な効用としての自己効用は無いに等しくなってしまうからである。これは、通常の日記の多くが、三日坊主で早々に休止されることと相通じる要因でもある。

ある程度の期間継続されながらも休止されてしまったブログは、本研究の調査対象者のケースと同様に、自己物語効果と舞台効果とのバランス崩壊によることが考えられる。しかし、ある意味で劇的な調査ケースのような場合には、対象者が採った行為と同様にして、ブログそのものが抹消されることともなろう。そのため、休止されたまま残されたブログの場合は、日記行為者が、個人のブログから得られる、自己物語効果による効用を感じられなくなったか、さもなければ効用が極端に減少したことが原因として考えられる。非日常性が刺激をもたらす情報メディアの特性から考察すれば、自己物語効果がもたらす効用は、一般的に物語を語り始めた当初に比して次第に生彩を欠くこととなろう。そのため、「日記」の裏局域での制作過程でも、開設当初と同様の効用を期待し続けるためには、縮小する自己物語効果による効用を拡大できる、舞台効果へ傾注せざるを得ないこととなる。しかし、自己物語効果による効用が減少すれば、いくら舞台効果による効用を増強しても、ブログから得られる効用は期待したものとはならず、さらに効用が感じられない状況へと向かうこととなろう。そのため、遂には興味が失せ、忘れ去られたように、休止されたブログが晒されることになると考えられるのである。

以上のような休止および閉鎖された状況でない特別なケースとして、継続され続けているブログを捉えてみれば、継続性を保つための困難さが改めて認識される。そもそも、情報メディアの特性から考えて、自己物語効果による効用は低減し続けるはずであり、舞台効果への傾注だけでは先の休止事例の考察と同様に、低下に歯止めをかけ、効用を維持し続けることは難しい。従って、継続され続けているブログでは、この効用を維持できる別の要因の存在が示唆されることとなる[44]。

その一つとしては、極端な例であるが、日記行為者が完全に自己陶酔の世界に没入し、自己物語効果と舞台効果を一方的な視点で独占的に享受することと相俟って、独自の世界観を示し、そして演じ続けるケースが考えられる。この場合、読者の存在やネット上での評判如何に係わらず、陶酔から醒めぬ限り継続され続けることとなろう[45]。

多くの場合にはこれとは逆に、日記行為が行為者に心理的変化を及ぼすことが要因となっている、と考えることができる。日記行為による自己認識は、自己の意識と共に実社会における

行為を変化させるであろうことから、新たな状況や体験をもたらすだけでなく、新たな自己への変革を促すこととともなり、新たな自己認識欲求が生ずる。それにより、常に自己物語効果は更新され続け、新たな認識や発見からその効果が維持され続ける、という推察である。しかも、ブログを媒介とするだけでなく、読者と直接コミュニケーションすることも可能であるため、このようなコミュニケーションも日記行為者の意識に変化を及ぼすこととなる。調査対象者が固定的な読者とコミュニティのような繋がりを形成し、その中で日記行為が活き活きと続けられていたことは、ブログがもたらす自己認識の効用だけでなく、このコミュニティでの認知や評価といった社会的位置付けを認識できたことに因る効用が得られていたこを物語っている。

しかしながら、コミュニケーションがもたらす創発性の観点に立てば、利用者の意図とコミュニケーションを行なうために選ばれたメディアの交互作用は、予測不可能で、意図せざる結果をもたらすことさえもある[Joinson 1999]。情報メディアの観点からしても、発信者と受信者とは知識や経験、考え方、捉え方など異なる要因が多いため、メッセージ表現に託された発信者の意図は、受信者には完全には伝達され得るものではない[神沼, 内木 1999]。つまり、日記行為者を巡るコミュニティの形成のような創発的効果は、行為者が準備して予め設定できることではなく、日記行為者と読者とのブログおよびコミュニケーションによる相互作用過程から社会的に構成されるものなのである。実際、調査対象者もブログの読者が現われてコミュニケーションが展開したことによって、メッセージを媒介とした直接的な「交流」だけではなく、その行動による心理的な影響と、その心理的な変化に起因するブログ記述行為の変容がもたらされたと述べている。

従って、日記ブログという情報システムにおいて、自己への物語効果を期待しながら、自己呈示行為を続けていくために求められることは、膨大かつ具体的なコミュニケーション行為ではなく、むしろ自己呈示行為にある一定の刺激を与えてくれる小グループでのコミュニケーション、もしくはそのようなコミュニティで形成される暗黙的なコミュニケーション環境にあると考えられる[46]。ブログでの日記行為者と読者とが形成する情報システムを、この観点を踏まえて捉え直してみると、図４に示すように[47]、双方の期待に基づいて創発されるコミュニティ空間とそれを介した意識の共有こそが、ブログの継続性を支えていると捉えることができる。図４に示される創発されたコミュニティ空間は、日記行為者と読者とで創り出した、一つの世界観に従った共通理解の場[48] と捉えることができ、双方の期待に基づいた共通の期待を創造することを通して、意識の共有が図られる場なのである。このような場においての日記行為者は、「日記」という作品を提供し続ける作家であり[49]、日記ブログは連載小説あるいは日記文学[50] として、物語に共感し、その展開を期待する読者が支えられた情報システムを形成していると捉えることさえできるのである。

６．おわりに

本論文では、日記ブログの行為者への聞き取り調査から得た知見に基づき、日記ブログを巡る情報システムの全容とそのメカニズムについて議論した。まず、公開の場であるウェブ上で営まれる日記行為に関する先行研究を総括した。その結果、日本を中心になされてきた先行研究の多くは、1998 年に実施された日記行為者へのアンケート調査に基づいた研究成果に端を発しており、その知見に基づいて社会心理学的な観

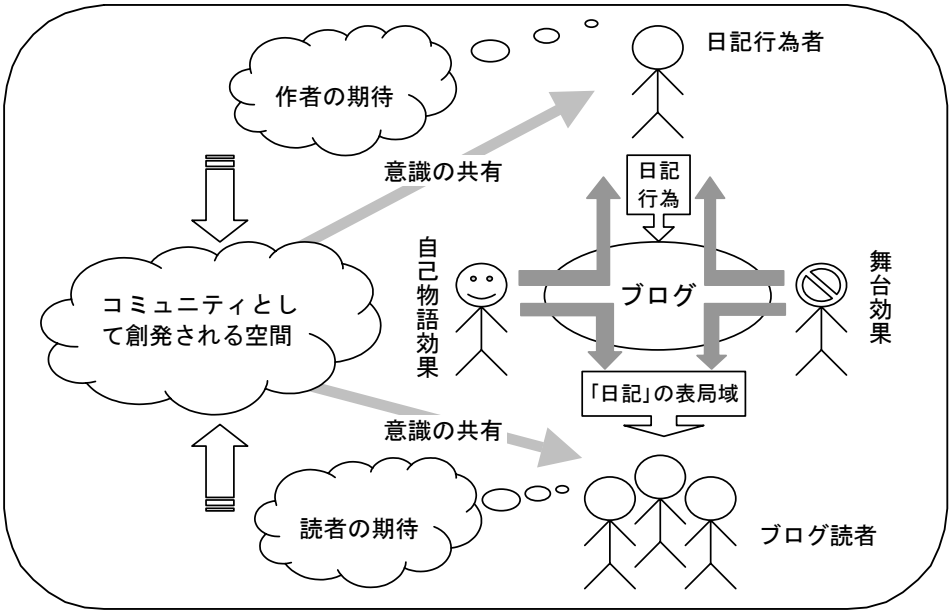

図４　日記ブログが創発する意識の共有関係

点から研究が展開されてきたことが明らかとなった。しかし、それらの研究成果からは多数散見される日記行為の中断および中止の原因とそのメカニズムを明らかにすることが困難であるため、ブログでの日記行為者への聞き取り調査を実施した。

日記行為者への聞き取り調査により、日記行為者はブログ制作画面での「日記」を記述する過程で、自己認識の効用をもたらす「自己物語効果」と、自己を演出することで自己物語の効果を拡大する「舞台効果」とを享受していることが明らかとなった。この双方の効果を内包する日記ブログを介して、読者とのコミュニティとしての情報システムが形成され、そのメカニズムが日記行為の継続性に強く関与していることを示した。そして、日記行為の継続性は、この情報システムを介して創発される、共通の世界観を持ったコミュニティ空間に深く関わっており、その空間から得られる意識の共有感覚に強く依存していることを議論した。

個人のブログ上で多くの人々が日記行為を営んでいるという状況は、自己を認識するために自己を物語るという営為を求めている人々が多数存在することの表れ、と捉えることもできる。実際、交換日記、自伝や自分史の出版ブームといった現象からも窺えるように、自分自身のことを他者に語りたいという願望は、ウェブ上での「日記」が登場する以前から見られている。個人のプライベートな行為である通常の日記でさえ、書き手は書かれた内容を理解し共鳴してくれる存在を心のどこかで期待している可能性が示唆されている[中野 1985，小林 1997]。

調査対象者が、「読者の存在が期待された自己を物語る場は、自分自身や自分の人生を俯瞰するための最適な空間と感じており、それ故に常にブログに引きつけられている。」と述べている[51] 通り、情報システムの観点から捉えたブログは、個人の日記行為に適したメディアと位置付けることができる。そして、存在する個人ブログの多くが日記ブログであるという状況は、

自己を物語る場としてブログは実際に適した情報システムであり、多くの行為者がその効用を高く評価していることを物語っている。そのことは、本論文で議論した情報システムとしての観点からの日記行為への適合性が、調査事例に基づく特殊な状況のみならず、一般的な妥当性を持った見解であることを示唆しているといえよう。

ブログのようなパーソナルな情報メディアが形成する情報システムを安定的に継続していくためには、情報システムの利用者であり運営者でもある個人が、良いシステムの形成を目指すと同時に、良いシステムであり続けられるよう努力することに他ならない。それが、日記行為者にとってよりよい自己物語の場を作り上げると共に、維持され続けることに深く関与するコミュニティの創発へと繋がることとなるからである。その意味からは、日記ブログの継続者はただ単に自己目的のためにブログを書き続けるわけではなく、規模の大小を問わず独自のコミュニティの中核的存在であり、牽引役としてコミュニティに「日記」コンテンツを提供し続ける、オピニオンリーダー的存在であり続けなければならないのである[52]。

本論文での議論が、端緒についたばかりのパーソナル情報メディアとそれを巡る情報システムが織りなす現代社会の様相を解明する研究の一助となれば幸いである。

---

1 Hyper Text Markup Language の略。World Wide Web (WWW)として利用されるハイパーテキスト記述用言語である。普及当初は、テキストエディタを用いて直接 HTML を書いていたが、近年では、ウェブページ作成用のソフトウェアやワープロソフトウェアで、視覚的に作成した完成イメージに対応する形で、自動的に HTML で表現されたファイルを作成できる。しかし、作成した HTML ファイルのサーバへの転送や、サーバ上のファイル管理などの点で、知識や技能が必要とされることが、一般利用者には高いハードルともなっていた。

2 Blog。ウェブログ (weblog)とも言われ、コンテンツの捉え方については諸説あるものの、原理的には「ウェブで見つけた情報を（通常は日付降順記事として）記録しておく(logging)」コンテンツである[三浦, 北山 2005]。ウェブのリンク機能を用いて、他のウェブページへ関連付けることができるだけでなく、電子掲示板のように、読者と記事を介してコミュニケーションすることも可能である。

3 本論文では、WWW ネットワーク内で公開された、個人的な日記のようなウェブページをこのように表記する。また、プライベートな日記帳につける通常の日記と、ウェブ上で綴るパブリックな日記型コンテンツとを明確に区別して議論するために、ウェブ上での日記型コンテンツを指し示す際には、このように「」を付けた表記を用いている。

4 文献[Joinson 1999]を始めとした多くの文献では、ブログはコミュニティ形成ツールとして位置付けられており、個人の日記行為については、商品紹介サイトのような、特定の社会的目的を持った活動として以外は、話題にさえ上げられていないが、基本的には米国でもブログは個人の日記として認識されているようである[Blood 2000]。

5 例えば、中国におけるこれまでのブログに関する研究論文を概観すると、メディア機能と、メディア技術、経済性の概ね三つの視点からのものが中心となっている。メディア機能としては、マスメディアの機能的視点から、新しい個人メディアであるブログの機能性を検討するものである。メディア技術としては、ブログに関する技術やそれが形成する情報空間についての理学的および工学的研究である。経済性の視点からは、ブログの経済的な意義や効用を探る研究である。逆に欧米では、Lee Sproull や Sara Kiesler、Sherry Turkle らの研究に代表されるような「人とコンピュータとの関係性の変容」という、より広い観点からの研究が中心である[Sproull, Kiesler 1992, Turkle 1995]。

6 「ウェブ日記」と「日記ブログ」とでは、同じ日記でも利用者の情報技術に対するスキルや意識に多少の相違があると考えられるが、ウェブ上でなされる日記行為であることから、双方を区別せずに議論する。なお、本論文では、ブログ上での日記行為者への聞き取り調査に基づいて議論を展開するため、以下では「日記ブログ」の用語を使用する。

[7] 先行研究者たちも、質的調査[Flick 1995]の重要性を今後の課題として挙げ続けている。しかし、調査対象者の発掘から、長期間および長時間に亘る対象者への聞き取り調査、膨大な調査資料の整理と検討など、多くの手間暇がかかることと、調査には経験と修練が必要とされることから、実際に取り組まれることはほとんどないのが実情である。

[8] 狭義の日記群は私的自己意識が高く、公開日記群は私的、公的いずれも自己意識が高い。日誌群は私的自己意識、公的自己意識ともに低い。備忘録群は、私的自己意識が低い[山下 2000]。これらの分析結果から、自分のことを書くという点では、ウェブ上の「日記」も普通の日記と同様に、自己に注意を向けるための、あるいは自己開示のための自己表現手段ととらえることができると主張している[山下，川浦，川上，三浦 2005]。

[9] [Derlega, Grzelak 1979]参照。

[10] 各軸をそれぞれ組み合わせ「自己指向・事実」、「自己指向・知識・ノウハウ」、「自己指向・心情」、「特定関係指向・事実」、「特定関係指向・知識・ノウハウ」、「特定関係指向・心情」、「一般関係指向・事実」、「一般関係指向・知識・ノウハウ」、「一般関係指向・心情」の９つに詳細化している。

[11] 日誌と公開日記の２タイプの書き手は、他の２タイプの書き手より賞賛獲得欲求が強く、備忘録タイプの書き手は拒否回避欲求が強いことが示されている。

[12] これらは、川浦らの研究成果を支持しない結果となっているが、主たる要因は、考察でも言及しているように、ブログ普及前後で利用者層が大きく変化したことにあると考えられる。川浦らは、第三の研究展開としても示したように、環境変化に対応すべくモデルに改良を施しているが、1997 年当時の利用者調査から得られた枠組みを基礎としているために、逆に利用スタイル毎に説明変数を追加するような対応を、余儀なくされていると捉えることもできる。

[13] 山本らの研究では、心理・意識的なメカニズムに着目するのでなく、日記ブログ執筆行動の結果としての反響が、反応としての新たな動機や執筆行動を生ずるというモデルを構築し、ブログ空間上のコミュニケーションの発生メカニズムを議論している[山本，諏訪，岡田，山本 2006]。ただし、このモデルでも、日記行為者の執筆継続意識は、自己表現、関係構築、情報提供という分類方法に基づいており、社会心理学的アプローチと同じ流れにある研究といえる。

[14] 技術決定論(technological determinism)、技術はもっぱら社会と独立に発展し、社会の進む方向は技術によって強い影響をうけるとする技術主導的な考え方。

[15] 広義の情報システムであり、単にコンピュータシステムおよび電子的なネットワークコミュニケーションシステムを指し示すものではない。

[16] 個人の日記ブログは、日本では匿名であることが多いため、ブログの変遷は同じサイト内であっても他者からは見え難い。実名が多い、米国の状況と較べ、文化的に興味深い差異である。

[17] 川浦らの研究成果が示す日記行為者の心理モデルは、研究の進展につれて次第に複雑になり、詳細化しているように見受けられるが、この観点からすれば本質的な因果が捉えきれてないことが複雑化の要因と考えることもできる。

[18] 現在休止中および削除されたウェブ上の「日記」の行為者への調査が不可欠であるが、既に活動を休止し残滓となった「日記」や、抹消された痕跡を頼りに調査することは、困難で成果もほとんど期待できないであろう。山下らも指摘しているように、これらの日記ブログの多くは話題に乗って試みに開設されたものとも考えられるからである[山下，川浦，川上，三浦 2005]。

[19] 調査対象者は、在日中国人女性であり、中国での社会人経験を経て、留学生として来日し、調査当時は大学院生であった。調査対象となる日記は、中国のブログサイト上に中国語で執筆されており、日本からのアクセスも可能であるため、中国在住当時から調査当時まで続けられていた。

[20] Bulletin Board System の略。利用者が投稿した記事をカテゴリー別に時系列を追って閲覧でき、投稿記事毎にコメント記事を付すことができる。

[21] Social Networking Service（あるいは Site）の略。狭義には、会員制で会員相互のコミュニケーションを促進および支援するサービスを提供するインターネットサイトを指すが、広義には、社会的に人々のつながりを構築できるサービスやインターネットサイトであれば、全てこの用語の範疇に含まれるため、ブログそのものも SNS といえる。

[22] RDF Site Summary の略。XML ベースの記述様式の一つで、ブログや掲示板、ニュースサイトで更新情報を要約して表示し、配信するために使用される。なお、RSS にはその記述様式や用途の相違から、Rich Site Summary, Really Simple Syndication など別の名称および規格が存在しているが、日本では主に先の用語の略称として用いられている。

[23] 昨今、日本で話題となっている Twitter と同様の個人向けコミュニケーションサービスである。

[24] 調査時点の 2010 年 10 月を指しているが、本論文執筆時の 2011 年 7 月現在も継続中である。

[25] role-playing game（ロールプレイングゲーム）の略

称。

26 この事の顛末に関する一連のブログ記事およびコメントに関しては、本人が日記ブログの閉鎖時に削除してしまったため、資料としても現存していない。そのため、ここに記された内容も本人から聞き出した回想に基づいている[崔 2011]。

27 この行為を通して、調査対象者は自由にかつ気楽に日記を書く気持ちを取り戻すことができたが、内容を読み返すことはほとんどなく、本当の自分像をうまく築くことができなかったためこの時期の日記からの効用は少なかった、と回想している。

28 調査対象者は、形式的な行為を手始めに「恐る恐る」慎重にブログを開始した状況が内容にもよく表れており、むしろ思いを一つにしたコミュニティと特定のイベントについてだけ語ることで、日記ブログの満足感を得ると同時に心の傷を癒していた、と回想している。

29 調査対象者は読者のコメントに注意を払わなかったわけではないが、日記内容そのものに関心を寄せるように努め、コメントに対する応答も必要最小限としていた、と回想している。

30 利用者のニーズに合わせた SNS への転換と説明されているが、パーソナルメディア上での自由な発言を抑制しようとする当局の介入または規制とも考えられる。

31 対象者は日本に在住しているが、中国国内の人々が日常的に利用するサービスサイトに匿名で中国語の日記を記すことを望んでいる。

32 2011 年 7 月現在、中国国内では以前のような匿名での投稿は規制されており、匿名で投稿できるブログサービスは提供されていない状況下にある。

33 浅野の言葉を引用すれば、自己物語として「語られた世界は、意味と方向性を持った時間的流れを生み出すものとなる」のであり、「自己はそれが物語られる限りにおいて、必ず結末から逆算された形で選択、配列されるのである」。そして、「物語が言語という記号を用いた営みである以上、その記号を記号として読み解く主体なしには物語は意味を成さない」ため、物語の本質的な要素として「聞き手・読み手」となる他者の存在が不可欠なのである[浅野 2001]。

34 通常の日記も、紙面というメディアを通した未来の受け手としての自己に語りかけるという意味からは同様であるが、他者に語りかける効用とは比べるべくもない。

35 浅野が述べるところの自己への物語の効果[浅野 2001]が生ずることとなる。調査対象者は、話の一貫性と滑らかな流れとなる表現に気遣うことで、多少のバイアスはあったものの、話の主題と方向が見えるようになり、客観的に自分を見られるようになったと回想している。

36 ブログのようなパーソナル情報メディアが個人劇場の舞台となり E. Goffman が述べるような他者への演技が試みられる場として機能していることは、文献[Meyrowitz 1985, 廣井, 船津 2000]でも示唆されている。

37 E. Goffman の言葉を引用すれば、「小道具や個人の外面を形づくる細々としたもの」が、管理ページという舞台裏である「裏局域」に「演技や役柄の全レパートリーという一種の折畳み式の形で収納されている」わけである[Goffman 1959]。

38 E. Goffman によって導入された用語であり、仕切られた知覚空間を「局域 (region)」とし、特定のパフォーマンスが行われる場所を「表局域 (front region)」、そのパフォーマンスが人に抱かせた印象が事実上意識的に否定されている場所を「裏局域 (back region)」と命名している[Goffman 1959]。

39 調査対象者も、ブログに於いて事実に基づきながらも自身の理想像を作り上げ、その行為を脚色することができたのは、この時間差によるところが大きかったと述べている。また、投稿者がニックネームを使用し、時間や場所などの情報に曖昧さを加え、加工した写真を使用するのも、個人情報の保護という観点よりは、演出効果を狙ってのことであったと回想している。

40 自己について語る自己物語の場合、語り手と登場人物はさしあたり別の視点であるにも関わらず、最終的には重なり合わなければならないという他の物語にはない独特の要請を課されている[浅野 2001]。

41 これまでの考察に基づいて再考すれば、読者の「わざとらしい」という書き込みは、虚飾であることを咎められたのではなく、表局域での演出が稚拙であることを揶揄した、あるいは咎めたコメントと捉えるのが妥当と考えられる。

42 この時点での調査対象者のプライベートな日記には「ブログが偽りの自己を作り出す場所に変わってしまうとき、それは投稿者にとっての意味もなくなる。」という内容が記されている。

43 それ故、ブログ開設動機より継続性に対する研究に主軸があるとも述べられている[山下 2005]。

44 情報システムとしてのブログを介したコミュニケーションも、ブログコンテンツやコメントなどのメッセージに着目する限りは、このジレンマから逃れることはできそうにない。

45 行為者の芸術的センスが認められ、評価されることもあり得るが、それは希なケースであろう。

46 このコミュニティの創発概念は日本でのブログ環境では少々異なっていると考えられる。長井が分析して

いるように、日本における一般的な個人のネット上でのコミュニティは、相互に現実社会を愚痴りながら、憂さを晴らすような空間であり、演じることよりも素直な心情の表現がなされている[長井 2008]。つまり、現実という舞台で演じていることとブログで自己を物語ることとで図のブログと同じ効用を読者に届けているわけである。逆に言えば、ブログ読者にはブログには記されていない現実という舞台で演じていることの共有が求められることとなり、この暗黙の了解こそがコミュニティ形成上の重要な要素ともなっていると捉えることができるのである。

47 情報創造こそが真の合意形成を促すことを示した文献[小川 2007]の図を参考に描いた。コミュニティの創発は、正に日記行為者と読者との合意形成と捉えることもできよう。

48 P. Checkland が SSM(Soft Systems Methodology)で示すところの accommodation といえる[Checkland, Scholes 1990]。

49 ウェブを介したコミュニケーションを解説した初期の文献では、発信主体そのものを優先した自己表現タイプのコミュニケーションとして捉えており、その特徴の一つとして、「人に向けられているよりは、文章を通して何かを呈示するだけであり、作品を示すようなものである」と述べられている[川浦 1998]。しかし、この作品性こそが展示物としてのウェブを介したコミュニケーションには本質的に不可欠なのである。

50 昨今話題となっている携帯小説やネット文学もこれと同様な情報システムとして成立していると考えられる。

51 調査対象者が置かれている今日の社会状況が、母国語での同胞に対する匿名による自由な表現メディアとしてのブログ利用を妨げていると同時に、より強く希求させている要因ともなっている。

52 ここで議論した内容は、中国人による中国語でのネットワークコミュニティでの事例が基礎となっているため、日本人による日本語でのネットワークコミュニティでの様相とは多少異なっていると考えられる。実際、日本人のコミュニティでは相互確認行為が中心で、一部の特別な場を除いては各自のアイデンティティを提示することは少ないようである[長井 2007]。

参考文献

浅野智彦 (2001)『自己への物語論的接近―家族療法から社会学へ』勁草書房.

Blood, Rebecca (2000) "Weblogs: A History and Perspective," *rebecca's pocket,* http://www. rebeccablood.net/essays/weblog_history.html, 7th Sept.

Checkland, Peter and Jim Scholes (1990) *Soft Systems Methodology in Action*,Wiley.

Derlega, Valerian J. and Janusz Grzelak (1979) "Appropriateness of self-disclosure," G, J Chelune and associate (Eds.) *Self-disclosure: origins, patterns, and implications of openness in interpersonal relationships*, Jossey-Bass.

Flick, Uwe (1995) *Qualitative Forschung, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH* (小田博志他, 山本則子, 春日常, 宮地尚子訳 (2002)『質的研究入門』春秋社).

Goffman, Erving (1959) *The Presentaion of Self in Everyday Life*, Doubleday & Company, Inc. (石黒毅訳 (1974)『行為と演技―日常生活における自己呈示』誠信書房).

廣井脩, 船津衛編著 (2000)『情報通信と社会心理』北樹出版.

情報通信政策研究所 (2009)『ブログの実態に関する調査研究－ブログコンテンツ量の推計とブログの開設要因等の分析』総務省.

Joinson, Adam N (1999) *Understanding the psychology of Internet behavior: virtual worlds, real lives,* Cambridge University Press. (三浦麻子, 畦地真太郎, 田中敦訳 (2004)『インターネットにおける行動と心理―バーチャルと現実のはざまで』北大路書房).

神沼 靖子, 内木 哲也 (1999)『基礎情報システム論―情報空間とデザイン』共立出版.

Kawaura, Y., Kawakami, Y. and Yamashita,K. (1998) "Keeping a diary in cyberspace," *Japanese Psychological Research*, Vol. 40, No. 4, pp.234-245.

川浦康至 (1998)「開く: パーソナルホームページの世界」『現代のエスプリ』No.370, pp.158-166.

川浦康至, 山下清美, 川上善郎 (1999)「人はなぜウェブ日記を書き続けるのか」『社会心理学研究』日本社会心理学会, Vol.14, pp.133-143.

小林多寿子 (1997)『物語られる「人生」』学陽書房.

長井貴瑛 (2007)『ネットコミュニティにおける非匿名ネットワークについての考察』埼玉大学教養学部平成 19 年度卒業論文.

Meyrowitz, Joshua (1985) *No Sense of Place –The Impact of Electronic Media on Social Behavior,* Oxford University Press, Inc. (安川一, 高山啓子, 上谷香陽訳 (2003)『場所感の喪失・上　－電子メディアが社会的行動に及ぼす影響』新曜社).

Miura, Asako. and Yamashita, Kiyomi. (2007) "Psychological and social influences on blog writing: An online survey of blog authors in Japan," *Journal of*

Computer-Mediated Communication, 12（4）, article 15. http://jcmc.indiana.edu/vol12/issue4/miura.html.
三浦麻子，北山聡（2005）「ウェブログ作者にとってウェブログとは何か」『日本社会心理学会第 46 回大会論文集』日本社会心理学会, pp.478-479.
村田佳世子（2003）『Web 日記コミュニケーションのもたらす心理的効用に関する研究』大阪大学人間科学部平成 14 年度卒業論文.
小川雄一（2007）『情報創造の場面における合意形成に関する一考察』埼玉大学大学院文化科学研究科平成 18 年度修士論文.
押見輝男（2000）「自己との対話　－日記における自己フォーカスの効果」『現代のエスプリ』No.391, 至文堂, pp.129-141.
崔初瞳（2011）『ブログ上での個人的日記行為の特性から見た行動継続性に関する考察』埼玉大学大学院文化科学研究科平成 22 年度修士論文.
志村誠（2005）「ウェブ日記・ウェブログによるパーソナルネットワークの広がり」池田謙一（編）『インターネット・コミュニティと日常世界』誠信書房, pp.87-111.
Sproull, Lee, Sara Kiesler（1992）*CONNECTIONS: new ways of working in the networked organization,* The MIT Press（加藤丈夫訳（1993）『コネクションズ－電子ネットワークで変わる社会』アスキー出版局).
菅原健介，鳴神順子（2004）『Web 日記行動とその心理について』聖心女子大学文学部卒業論文.
Turkle, Sherry（1995）*Life on the screen,* Simon & Schuster Paperbacks（日暮雅通訳（1998）『接続された心　－インターネット時代のアイデンティティ』早川書房).
山本仁志，諏訪博彦，岡田勇，山本浩一（2008）「ブログ空間上のコミュニケーション発生メカニズムの分析」『日本社会情報学会誌』日本社会情報学会，Vol.20, No.1, pp.29-42.
山下清美，川浦康至，川上善郎，三浦麻子（2005）『ウェブログの心理学』NTT 出版社.
山下清美（2000）「WEB 日記は、日記であって日記でない」『現代のエスプリ』No.391, pp.166-180.
吉田美緒（2006）「ウェブログ利用が作者に及ぼす影響」『日本社会心理学会第 47 回大会論文集』日本社会情報学会, pp.504-505.